

38
光村 小国 623

垣内松三著

教育部
資料室

希

望

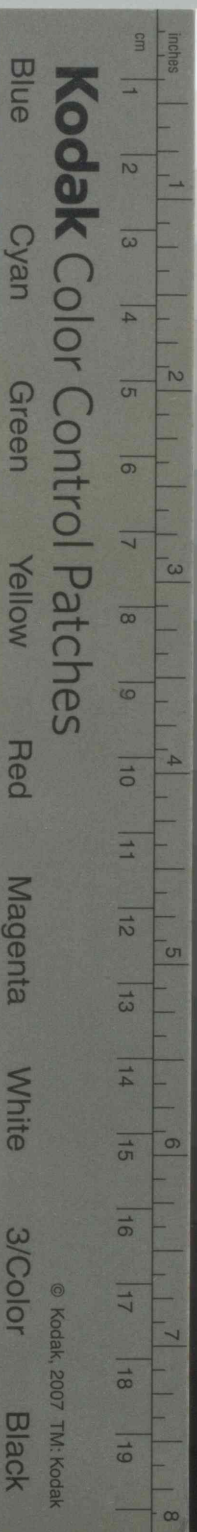
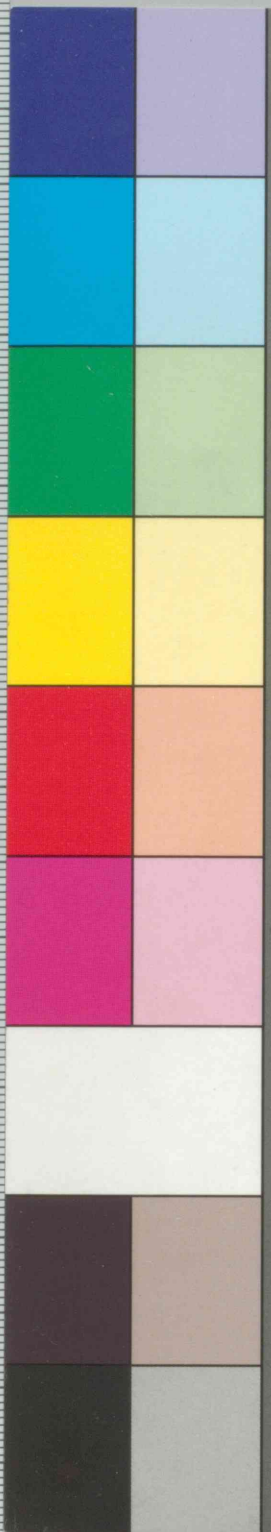
新国語 六年 下

文部省検定済教科書

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449753



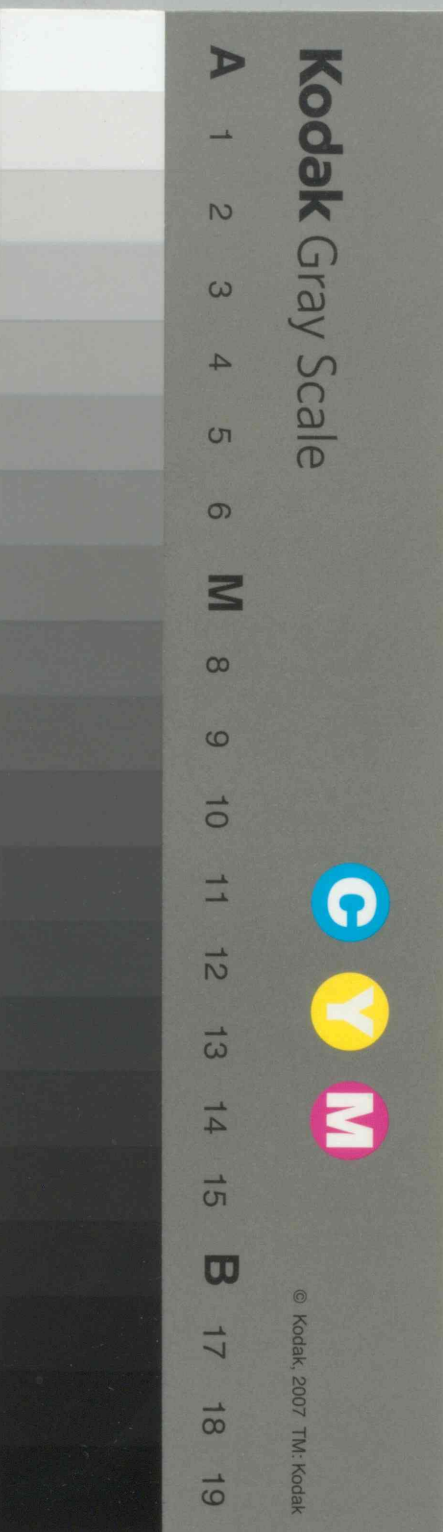
小KC
Mi65



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

60321
教科書文庫
6
810.
34-1950
01304.
49753



指導者のために

(一) この本は、上中巻の趣旨を受けるとともに六か年の学習を総合して、世界の平和と文化の進展に寄與すべき人間の現成を主眼とし、郷土・祖國・世界を一貫して生くべき崇高な人間精神を養いながら、身心の発達に即して、國語学習における諸作業を自發的創造的に導くように組織し編集してある。特に言語活動を中心として、理解と表現の学習が興味のあるうちに有機的發展的に行われるように努めた。

(二) この本の内容は次の三つの題目に分かれている。

一、大きな歩み

ノーベル賞に輝く人々の業績に取材し、世界の平和と文化の進展に寄與すべき新たな生活態度を自覺せしめながら、言語教養の意義を諒得させることにする。

二、かがやく目標

4頁の活動・ユネスコの精神・TVAの業績等に取材し、人類の向かうべき目標を明示し、世界の平和に対する信念と文化の進展に対する協力の心を養いながら、

ら、豊かな言語活動に導くことにする。

三、希望

全六か年にわたる國語学習と人間現成の趣旨を綜合して、個人・人生・郷土・祖國・世界を一貫し、幸福と文化の進展を目標として、正しく生くべき態度を養いながら、新たな希望のもとに新しい開始する覚悟を高唱して、國語学習の眞意をすることにする。

(三) この本に提出した新出語は二二七語で、毎ページの新語率は二・五八語である。各課ごとに学習の仕方を示し、度の向上に努めるとともに、新語表・新字表を掲げて使用上の便を図ることにした。

(四) この本のさし絵は、学習上重要な位置を占めるので、特別な考慮が拂われている。

(五) この本の使用期間は、だいたい一月から三月までを目標として、大題目を平均一か月あてとしたが、それを用要はない。地方の実情と児童の個人差を考慮して有効に使用されたい。

(右は本書の概要である。詳細は新國語指導書を参照されたい。)

広島大学図書

0130449753



寄贈

昭和二十五年 月 日
文部省 検定 済
小学校国語科用

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449753

希

望



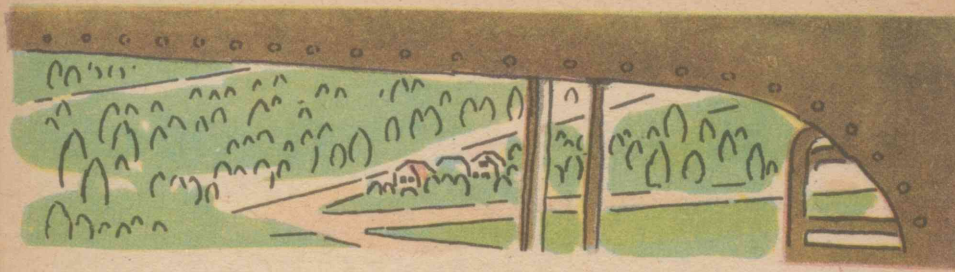
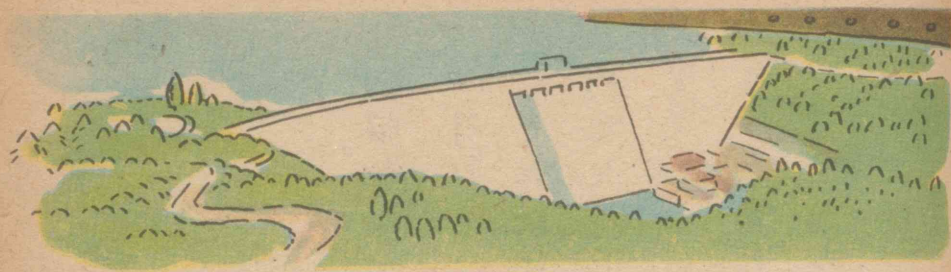
広島大学図書

0130449753



新国語 六年 下

広島大学
教育学部図書



目次

一 大きな歩み……………4

(一) 日本人の進出

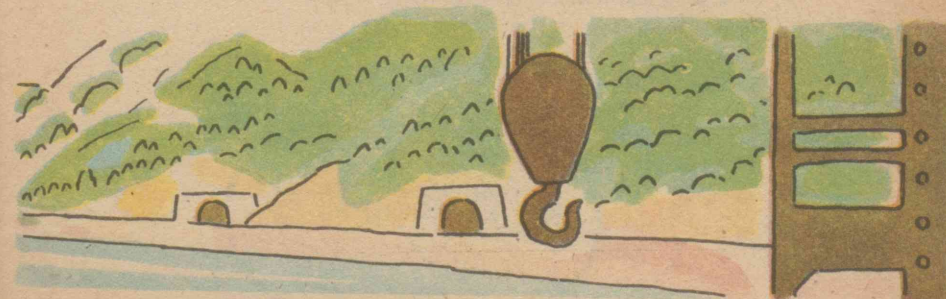
(二) その母その子

(三) 赤十字の旗

二 かがやく目標……………33

(一) 平和への道

(二) 力の結集



三 希望……………59

(一) われらの希望

(二) 風車の歌

新しいことば
漢字表



一 大きな歩み

(一) 日本人の進出

昭和二十四年の「文化の日」に、いかにもこの日にふさわしいニユースがもたらされ、われわれ日本人の心を明るくした。

それは湯川秀樹博士が、ノーベル賞の中の物理賞の受賞者に内定したしらせであつた。世界文化の大きな歩みの中に、進出していく日本人のすがたを、まのあたりに見るような氣持がして、国民に深い感動と大きな希望をあたえないではいなかつた。ノーベル賞とは、科学者ノーベルの遺言によつて、世界の科学や文学や平和運動に、最大の業績を示した人に授与される、

世界的な、名譽ある大賞である。

ノーベルは、スエーデンのストックホルムに生れ、化学を研究し、後にアメリカ合衆国で機械学を学んだ。一八六六年にダイナマイトを發明し、ついで、無煙火薬を創製した。これによつて、土木工事や採鉱作業などが、どれほど能率的になつたかしない。

ノーベルは、世界各地に爆薬工場を經營し、多額の収入を得たのであるが、その金を有益なことに使用したいという遺志によつて、ノーベル賞が制定されたのである。

第一回ノーベル賞授与式は、一九〇一年十二月十日、サン・レモの大音楽堂で行われ、レントゲン博士（物理賞）、フアントホフ教授（化学賞）、ベーリング博士（医学賞）、サリ・ブリドム

氏（文学賞）、アンリ・デュナン氏とパシー氏（平和賞）の六氏が、最初の榮譽を勝ち得たのであつた。

それ以後、今日まで、世界的な学者として、世界的な人物として、この名譽をになつた人々は、百数十人という数に達したのであるが、残念なことには、ひとりの日本人の名も、その中に見いだすことはできなかつた。

それだけに、湯川博士は、日本人最初の受賞者として、世界から注目され、日本の學術界に大きな自信をあたえ、後進に新しい光を示したのである。

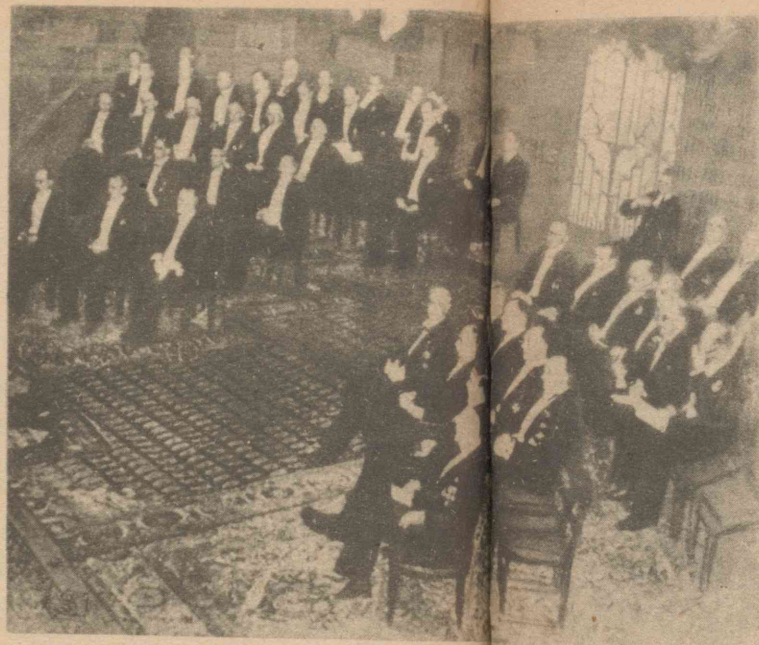
博士にノーベル賞が授与される時の光景は、湯川夫人が、日本の新聞に寄せた、次の一文に

よつてよくわかる。

「どるものもとりあえず、ニューヨークをあとにしたのが七日の昼前、それからきょう十四日まで、ほんとうにゆめのよゑに過ぎしてしまいました。

まだ、ゆめはさめておりませんが、日本のみなさまに、一言でも申しあげたいと思ひ、ねる時間無理にさいて、ペンをもちました。

十二月十日、ノーベル賞授与式



の当日、屋上に日本の国旗のひるがえっているグラウンド・ホテルをあとに、夫はえんぴ服を、私は赤いふりそでを着て、会場であるストックホルムの音楽堂へでかけますと、表は黒山のような群衆で、定刻午後四時前に、場内はちよう満員の盛況でした。

私は二階の一番手前、式のようにすが手にとるように見えるよ
い席に案内されて、きょういつしよに受賞される方の、奥様
お二方とならんで、今か今かと待っていました。

やがて、ラツバが鳴りひびき、音楽につれて、皇太子、皇太子妃を初め、王室の方々がえしゃくをされつつ、一階の一番前の客席に着かれた後、二どめのラツバを合図にぶ台の正面のドアが開かれ、満場の人々のかたずをのんで注目する中へ、

夫を先頭に三人の受賞者と、そのしよかい者三人が、ゆったりとした足どりて出てこられました。その時には、むねがわくわくし、なみだがこみあげてきてどうすることもできませんでした。

さて、しよかい者ワラー博士の業績しよかいの後、夫がまん中の階段をおりて、皇太子に近寄つていくのを待ちきれず、皇太子の方から二三歩歩いて近寄つていかれ、メダルと賞状を手わたされ、いかにも親しそうに何かお話をなさるのを、夫が一つ一つうなずいて、やがてかたいあく手、この光景は、親密の情があふれていて、まるで永年の知己が久しぶりに会った時のような、なごやかな喜びを感じました。かくして、初めから終りまで、授賞のたびごとに美しい音楽

が奏され、莊嚴のきわみをつくした儀式が済むと、市の公会堂で祝賀会が開かれました。細長い、美しいおへやでお待ちしている私どもをみつめて、皇太子が近寄ってこられ、あく手をなされつつ、お祝いのことばをたまわりました。これを読んで、当日の光景を想像し、その感げきを新たにするとともに、さらに日本人の進出を期待したいものである。

学習の仕方

- 一 大題目と、この文の題目とのつながりを考えながら学習しましょう。
- 二 ノーベル賞の制定された理由、受賞者の名譽について読みとりましょう。
- 三 湯川博士の受賞式の光景で、心をうたれたことを書きましょう。
- 四 「ノーベル賞にかがやく人々」について調べたり、話しあったりしましょう。
- 五 世界文化における「日本人の進出」を話題にして、話しあいをしましょう。

(二) その母その子

「この親にしてこの子あり。」ということばがある。

キューリー夫人とその長女イレーヌこそ、このことばをうらづける人たちであろう。それは、次のような事実を知れば、だれしもうなづくことができる。

ノーベル賞が制定されてから、いくたりかその名譽をかち得た人々があつたが、同一人で二回も受賞の榮にあずかつたのは、今日までただひとりしかない。それはキューリー夫人である。かの女は、一九〇三年、ラジウムを発見してノーベル物理賞を得たが、さらに八年後、ラジウム抽出に成功をして、ノ



をか得したとである。

しかも、意味深いのは、キュリー夫人の場合も、その子イレヌの場合も、共に夫との協力によつて、この大発見をなしとげたということである。

今、ここで、その科学的功績や原理などを説くことはできないが、母と子がともにそろつて、かくも偉大なことを、この世

ノーベル化学賞を受けたのである。かの女こそは、一生を通じて、真にその才能を出しきつた、まれな天才であつた。さらにおどろくべきことは、その長女イレヌが、人工放射能の発見によつて、一九三五年に、ノーベル物理賞



において仕とげたということについて、心からさん嘆せざるを得ない。ただ科学的な偉大さばかりではなく、母子ともに、祖国への奉仕と、人類の幸福への情熱とを、合わせもつた人格者であつたことを思う時、いつそう尊敬しないではいられない。この母子について、次のようなそう話があるが、これによつてその高い人間性と深い心情とを、しのんでみようではないか。

○
キュリー夫人が、パリのソルボンヌ大学で、物理学の一講義をたのまれて、初めて教だんに立つた日のことである。

この講義は、夫のキュリーが担当

していたのであるが、かれは、思いがけない災難で急死してしまつたので、欠講になつていたのである。そのあとを、だれに続けてもらおうかと、大学ではいろいろ相談をした結果、キューリー夫人にたのむことにきまつた。しかし、婦人が大学で講義をするといふことは、かつて例のないことであつた。それが、かの女によつてうち破られたのであるから、世間では、とりどりのうわさをしたのも無理はない。

第一回の講義の日は、一九〇六年十一月五日、月曜日午後一時半といふ時刻にきまつた。その日の正午、キューリー夫人は、ただひとり夫のねむる墓地に立つた。そうして、

「きょうから、わたしが、あなたのをひきつぐことになりました。」

と、夫に話しかけ、祈つていた。

一方、大学の講堂では、初の講義を聞こうとする人々が、ところせまいまでにおし寄せていた。ろう下にあふれ、ソルボンヌの広場にまであふれていた。その人たちは、もちろん講義をきくためではあるが、中には好奇心にかられて聴講券を求めた人もないではなかつた。

いつたい、ソルボンヌ大学で、初めて教授として認めたといいう婦人は、どんなようすをした人であろう。キューリー夫人が、講壇から最初にはくことばはなんでであろう。はたして、大臣や大学に対して礼をいうであろうか。どうか。前任者に対してのほめことばをどうするであろうか。というのは、新任者は必ず、前任者についてさん辞を述べることが、大学の例になつて

いたからである。この場合、前任者はわが夫である。人の前で、自分の夫をほめたたえるであろうか。——というわけである。この、やりにくい立場におかれたキューリー夫人の出方は、どうであつたらう。

講堂の白いとびらが静かに開かれる。聴講席からはいつせいはく手が起る。黒い衣服をまとつたキューリー夫人が、やや急ぎあして講壇に立つた。かの女は、手にしたわずかばかりの書物とノートをそこにおいて、あいさつをした。が、はく手はなかなかやまなかつた。

心もち頭をさげて待っていると、はく手は静まり、やがて水をうつたやうになつた。

まつすぐ前をみつめたかの女の口から、最初のことばが発せられた。

「約十年このかた、物理学の方で達成されました進歩を考えてみます時、人は電気および物質について、われわれの思想の中にひき起された動きに、驚嘆させられます。」

このことばは、夫の講義の最後のことばなのであつた。夫の残していったことばをそのまま受けとつて、夫人の講義の最初のことばとしたのである。

なんとという夫への信頼であろう。なんとという敬愛、なんというつつましさであろう。

かの女は、美しい声で、なめらかに講義を進めていったが、なみだのすじが、青白いほおの上を、いくたびか伝わり流れた。その日は、それに続いて新しい学説の講義をしたが、終ると

講だんをおり、きた時と同じとびらから足ばやに出ていった。人々は、そのりっぱな講義と態度の美しさに心をうたれた。

○ イレーヌは、ソルボンヌ大学の理学部を卒業してから、母の研究所で、その指導のもとに研究を続けた。

ジヨリオと結婚してからも、いつもふたりは、まっ白な実験服を身につけて、学問の道をひたむきに進んだ。

一九三六年六月、イレーヌは選ばれて保健大臣になった。大臣といえ、一国における最高の官職であり、大きな名譽であろうが、イレーヌは、そうは思っていないかった。

「わたしが大臣であることは、はたしていいことか、悪いことかわかりません。科学に専念するために、この職をやめなけ

ればならないかもしれませぬ。」

といつていたが、はたして、三か月ほどしてかの女はこの職を辞した。もつぱら、科学に親しむためであった。

こうした態度は、キユーリー夫人の夫、つまり、かの女の父が、政府から勳章をあたえられようとした時、

「いや、勳章はよしてもらいましょ。科学者に勳章は役にたちませぬ。研究所があればいいのです。」

○ といったのと、相通じるものがある。

学問に対するひたむきな態度は、キユーリー夫人の父親、スクロドフスカにもつながっているように思われる。

スクロドフスカは、中等学校の教師をしていたことがある。

わずかばかりの給料で生活していたのだが、思いきつて高價な物理機械を買いこんだ。物理は、実験によつて学習されなければならぬと信じていたからである。しかし、学校には、この機械を購入するだけの予算がなかつたので、かれは私費を投じた。それが、悲しむべき一家破産の原因となつた。

ある朝、見知らぬ男がきて、家の中の諸道具にべたべたと紙をはつて、その所有権をとりあげた。



ぼんやりとそれを見ている父を、下からそつと見あげていたのはキューリー夫人、——そのころは、まだいとけない少女であつた。子ども心にも、深い同情の目をもつて見あげていると、これに気づいた父が、しつかりだきあげてささやいた。

「おまえたちが、かわいそうだね。」
すると、

「いいえ、おとうさん、学問のためですもの。」
と、少女とは思えないことばで、反対に父をなぐさめはげましたのであつた。

キューリー夫人は、五才の時、母を失つてしまつたが、母は女学校を経営していたほどの、教養の高い婦人であつたから、その血を受けているかの女が、こういうことばをいつたのも不

自然なことではないかも知れない。

「この親にしてこの子あり。」といったが、さらに、「この母にしてこの子、この孫。」というように、ある家系には、一つの流れが脈々と流れ伝わっているのかもしれない。キューリー一家に流れている精神の伝統こそ、人類の典型ともいふべきであろうか。

学習の仕方

- 一 前課とのつながりを考えながら学習しましょう。
- 二 この文をまとめて、話ができるように学習しましょう。
- 三 この文を読んで、特に心をうたれた点を書き出してみよう。
- 四 キューリー一家に似た家系について調べたり、作文に書いたりしてみよう。
- 五 「科学者の態度」を話題にして、話しあいをしましょう。

(三) 赤十字の旗

第一回ノーベル賞の平和賞を受賞された人に、アンリ・デュナンがいる。

その榮譽は、デュナンの全身にみなぎっている大きな人類愛すなわち、万国赤十字社の創始者として、博愛精神を世界にうつたえた、その功績に対しておくられたのであった。

アンリ・デュナンは、わかいらから博愛主義者で、慈善事業に生きることを念願としていた。父は、これに反対して、その望みは、わかさの感げきにすぎないといった。ただの感しようであるともいった。

「まだ、おまえの考えが足りないのだ。貧しい人々をつくりだしたのは、社会の制度じゃないか。それなのに、おまえが愛を口にし、神を唱えて何になる。ひとりの慈善が救えるものは、せいぜいひとりの貧しい者にとどまる。」
と、父はいうのである。

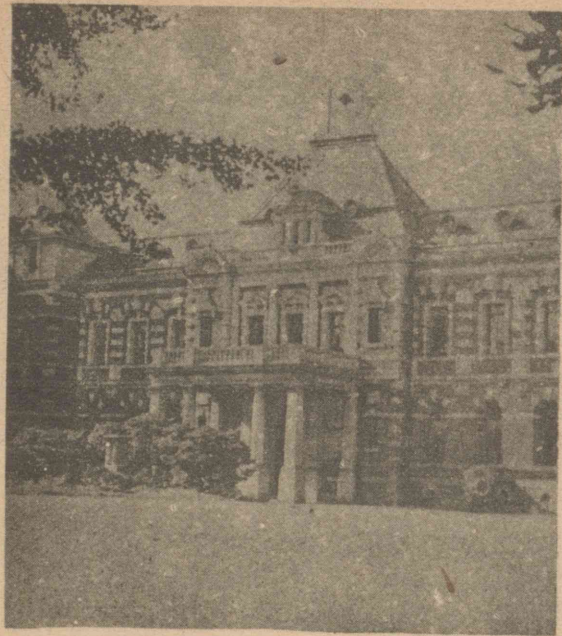
「でも、おとうさん、そのひとりの心が、やがては世の中から、貧しい人たちを救うことにならないでしょうか。」
デユナンは、自分の信念をひるがえさなかつた。

「おまえは、それをいつまで待つというのか。百年前だって、千年前だって、ひとりぐらゐの慈善家はいただるうに、今もつて、この世の中は、貧ぼう人であふれているよ。」
「おとうさん、永遠を信じてください。」

父と子の考え方のちがひの中になつて、なぐさめてくれたのは妹のアンナである。アンナは兄のかたい信念を信じているひとりであつた。

もうひとりにはアンナの友だち、——後に、デユナンの妻になつたファーニヤであつた。ファーニヤは富有の身でありながら、よくデユナンの心持を理解して、よき協力者になつてくれた。
デユナンは、ファーニヤに語つた。

「私は、隣人を助ける大いなる愛が、貧しい人たちを救うこ





とだと父にいいはりました。が、考えてみれば、この愛も社会の制度によつて生かされなければ、人を救つていくことができなと思うようになりました。すると、かの女は、

「フランスには、パウロ協会があつて、病院、孤児院、養老院などを経営してありますね。ドイツには、フリードネルの孤児院や養育院などがあつて、いい仕事をしているでしょう。あなたのお仕事をなさろうというのですか。」
とたずねました。

デユナンはそれに答えて、
「そういう施設をスイスに作ることだけが、わたしの目あててはないのです。もっと大きな愛で、世界をつなぎたいのです。世界が一つになつて、世界ぢゅうの病人や貧しい人を救つていく仕組みがほしいのです。」
と聞いた。

「ファニーヤは、この高い理想と力強いことばに、すっかりうたれた。そして、どんな苦しみがあるうと、デユナンと共に、この強い信念と大きな希望に生きぬこうと決意した。」

「ファニーヤ、でも、この苦しみはなまやさしいものではないよ。あなたのように、裕福に育つた人には、いつそうたえられないでしょう。」

「いいえ、きつとたえしのびます。『人その友のために生命をすつる、これより大いなる愛なし。』このことばを守りぬきます。」

このようにして、ふたりの心は結ばれていった。

一八五九年、オーストリア軍とフランス軍とが、ソルフェリノというところで戦争をしていた。そのはげしい戦争のありさまを、デュナンはくわしく書きつづり、「ソルフェリノの思い出」と題して世に送った。

戦場では、一日に四万の兵士がきずつきたおれていくこと、この不幸な人々がそのままうちすてられていること、敵国の兵士だからといって、手あてをしてやらないのは人類愛にもとることなどをうったえ、終りに、世界の国々は戦争のぎせい者を救う条約を結ぶべきだと勧告したのである。

この書が発表されるや、各新聞がこれをとりあげて論評し、支持してくれたので、デュナンの仁愛の精神はしだいに世に広

まっていた。

このころ、デュナンは、あちこちに孤児院をひらいて、あわれな子どもたちのせわをしていたが、その費用を出すために、ファーニヤの持っていた土地は、かたはしからなくなつてしまひ、デュナンたちが生きていくためには、ファーニヤの着物まで失わなければならなくなつた。

「財産などのなくなることは、覚ごはしていましたが、わたしたちの子どもに飲ませるミルク代がなくては——」。

と、ファーニヤが、夫にささやかなければならないほどになつた。孤児院の食事代を支拂う金もないのを見て、請求者たちはつくえやいすなどまで、めぼしいものはなんでも持ち去つた。

「金のたしになる物なら、ペン一本でも持つていってください。」

デュナンは請求者たちにわびをいい、ファーニヤには、「こんな苦しい思いをかけてすまないが、この仕事はどこまでも続けようよ。」

と、いつて、はげました。

「わたしには、ソルフエリノの戦線で、毎日きずつきたおれたいく兵士たちの、あの顔が見えるようだ。うめき声が聞えるようだ。あのかわいそうな人たちを救う制度を、どうしても作らなければ——。」

こうしたデュナンの望みが、ようやく報いられる日がきた。それは、ジュネーブ公益協会のモアイニエが、「ソルフエリノの思い出」に書かれた精神を実現しようとして申し出てきたのである。「ほんとうに救済の方法が考えられるのでしようか。」

「考えられるどころか、いまに国際的な救済条約ができることになるでしよう。」

デュナンとファーニヤはどんなに喜んだことでしょう。

「これについて、ジュネーブには、すでに五人の委員が選ばれており、やがて、世界各国から、代表が集まって来るはずですよ。」

モアイニエはことばをついで、

「あなたのお力で、世界の平和は、一つの基を固めました。あなたの努力は、偉大な平和事業の根幹をなしたものです。」
と、いつた。

やがて、モアイニエの努力によつて、万国赤十字条約が形づくられ、一八六三年にはジュネーブで国際協議会が開かれ、あ

くる年の八月、ジュネーブ条約が結ばれた。ここに、世界初めての赤十字の事業がたん生したのである。クリミヤ戦役におけるナイチンゲールの、天使のような人類愛とともに、アンリ・デュナンの博愛運動は、赤十字の旗のひるがえるところ、世界のすみずみにまでおよんでいる。

学習の仕方

- 一 この文を、まとめて話ができるように学習しましょう。
- 二 デュナンの理想と人生的態度について、深く考えながら学習しましょう。
- 三 この文を読んで心をうたれた点、考えさせられた点を書きだしましょう。
- 四 日本の立場から、世界の平和について考えを進めてみましょう。
- 五 三つの文を合わせて、世界文化の「大きな歩み」について話しあいをしましょう。

二 かがやく目標

(一) 平和への道

先生 私たちが、現実の立場から、世界平和への道を進もうとしたら、具体的にはどんなにしたらいいのだろう。

よし子先生、みどりさんたちのはんでは、ニュース・クラブというのをつくって、何か始めているようですよ。

先生 ニュース・クラブ。おもしろそうなクラブだね。

一男 ニュースというのは、新聞やラジオの、あのニュースとはちがうんですか。

みどりあれとはちがいます。ちよつと似ているようなところもあ

りますが、意味も目標も全くちがいます。

よし子 どんなふうにかがうのですか。

みどり おたがいになんでもうちあげたり、できごとを知らせあつたりするところは、ちよつと似ていますが、それだけではないのです。みんなが、いつまでも親しくしていきたい、たがいに助けあい、結びあつていきたいというのが、わたしたちのクラブの目標なのです。

正雄 それをニュースというのは、少しへんだなあ。

みどり 久さんが、ニュースというなまえをつけたのです。久さん、説明してあげてください。

久 ニュースというのは、頭文字を集めたので、そのつづりは NEWS です。なんの頭文字か、みなさんあててください。

定男 なんだらう。英語の頭文字をとったの。

久 そう。日本語をローマ字で書いて、その頭文字を集めてみたが、まとまった発音にならないし、口調も悪いので、いさんに教えてもらつて、英語になおして、その頭文字を集めたのさ。

正雄 それではわからないよ。まだ、英語を知らないんだもの。

久 先生、おわかりですか。

先生 さあ、わからないね。NEWS を、日本語をローマ字で書き表わす時の頭文字にあてはめると、どうなるの。

久 N は K、E は H、W は N、S は M になります。

定男 わかった。北、東、西、南、だね。

先生 なるほど、N はノース（北）、E はイースト（東）、W はウェ

スト (西)、Sはサウス (南) だからね。

久 そうです。ぼくたちのはんの人たちが、まず なかよくし、たがいに結びあい、その心持を四方にひろげていこうという意味です。

みどり いつか、たんぼぼというしばいをしましたね。私たちが大きくなつて、あの綿毛の種子のように、それぞれ遠い所にいつても、そこに、いまの精神の根を深くおろそうと話しあつたのです。

先生 りっぱな考えです。一口に世界の平和とはいうが、そういう近いところから第一歩をふみださなければなりませんね。まだほかに、ニュース・クラブのような目標をたてているはんがありませんか。

正雄 ぼくたちのはんでは、特別になまえはつけてはいませんが、4Hクラブのことを調べ、その精神を生活にとり入れようと話しあっています。

先生 いいね。

久 あ、アメリカで行われている運動だね。

定男 4Hというのは、やはり頭文字を集めたのですか。

先生 そうだ。ヘッド (頭)、ハート (心)、ハンド (手)、ヘルス (健康) の四つの頭文字のHをとって、4H運動と名づけているのだよ。正雄くん その精神をわかりやすく話してごらん。

正雄 はい。アメリカの4Hクラブの会員は、こんなちかいのことばでそれを表わしています。「私は、正しい頭のう、忠実

な心、人のために役だつ手、生活の向上に必要な健康、これら四つのHを、クラブのため、部落のため、国家のために、みがききたえることをちかう。……これが、4Hの意味です。

よし子 アメリカの4Hクラブは、十才から二十才までの青少年たちの間に生れたもので、もう三十五年にもなる歴史をもつていて、今では、全国にひろまり、学校と社会との、生きた結び目となつてゐるそうです。

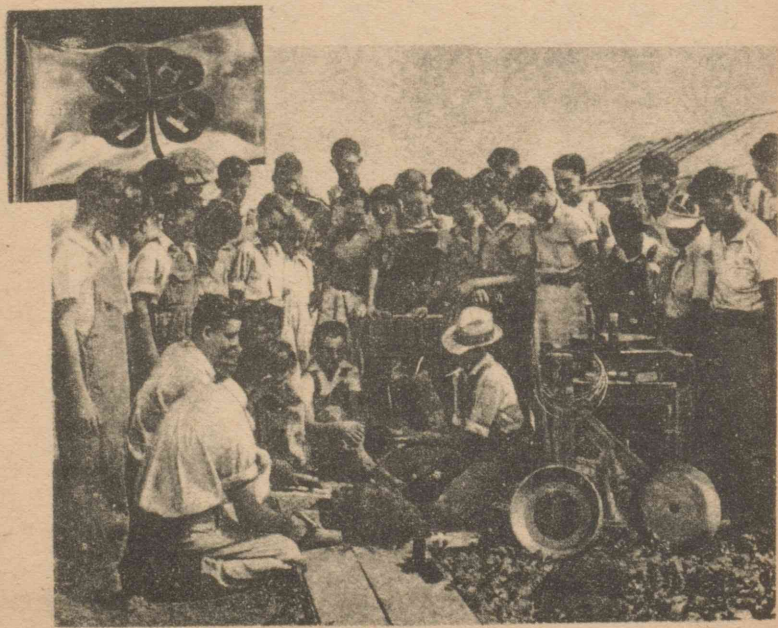
先生 そうだ。クラブの人たちはその精神を生かして、その地方の農業改良や、農耕生活の改善などにまでおよぼそうと、本気になつて努力してゐるそうだ。

一男 ぼくは、4Hクラブのちかいのことをばを、つくえの前に書

き出しておいて、毎朝読むことにしています。

先生 いいことだ。みんなの話を聞いていて、じつにたのもしいと思う。とくに、そういうことを知っているというだけでなく、それを生活にとり入れて、実行に移そうという態度がいい。

定男 先生、頭文字で思ひだしたんですが、ユネスコというのもそうでしよう。



先生 そうそう、ユネスコも頭文字を集めたなまえだ。
みどり ユネスコということばを、時々耳にしますが、どうい
うことなんでしょうか。

先生 わかりやすくいうと、教育・科学・文化などを通して、世
界の平和を確立し、人類の幸福を増進しようとして設けら
れた、国際機関のことなのだ。ユネスコ憲章というものが
あつて、その中にこういうことばがある。黒板に書くから、
ノートに書きとめておきなさい。

「戦争は、人間の心の中で始まるものであるから、人間の心
の中で、平和の防衛が建設せられなければならない。」

よし子 意味がむずかしいようですけれど――。

先生 戦争というと、国と国との大きな争いで、われわれの力で

は、これを防ぎ止めることはできないと思いがちだ。しか
し、そうではない。戦争は大きなできごとにはちがいない
が、そのもとは人間たちの考え方に根ざしている。ひとり
びどりの内にすくつているのだ。だから、たがいに理解し
あい、助けあつて、「争い」をさけていけば、戦争の芽も出て
こないのだ。――とユネスコ憲章がさげんでいる。

正雄 永久に武器をすてるといった日本の憲法と、ユネスコの精
神とは、強いつながりをもっているんじゃないですか。

先生 そうだ。日本こそ、平和への道をまっすぐに進まなければ
いけない。この光榮ある憲法を守り通さなければならぬ。
先生、ぼくたちのニュース・クラブと、ユネスコの精神と
がよく似ているように思います。

先生 きみたちのニュース・クラブの精神を、地球上にひろげていくのがユネスコだよ。いかにも六年生らしい、しかも、これからの日本にふさわしいきみたちの考えを聞いて、わたしはなみだが出るほどうれしい。やがて、この学校を卒業するが、どこまでも、平和の道を進んでいくのだよ。

学習の仕方

- 一 「赤十字の旗」とつながりを考えながら、学習しましょう。
- 二 会話している人たちの生活態度や、話し方に気をつけながら学習しましょう。
- 三 ニュース・クラブ、4Hクラブ、ユネスコの関連をはっきりとさせ、自分たちの生活とどう結びつけるかについて、書いてみましょう。
- 四 自分たちの学級、はん（またはグループ）の活動について話しあいましょう。
- 五 「世界の平和」を話題にして話しあいをしてみましょう。

(二) カの結集

わたしたちは、小学校に入学した当初から、よく話しあいをしてきた。それは、どの学習にも行われたが、とくに国語の時間にもその力がみがかれた。

このごろでは、一つの問題を中心にして、どの人もどの人も、自分の思っていることを話すようになった。また、人の話をよく聞くようにもなった。

「みんなといっしょに話をしあう。」ということとは、やさしいようではあるが、なかなかむずかしいことだと思う。六か年をふりかえってみると、それがよくわかる。初めのうちは、話をする

人が、いつも五六人に限られていて、ほかの人たちはあまりものをいわなかった。いおうとしなかった。中には、ちつともいわない人もいた。だからといって、人のいうことをよく聞いているかという点、そうでもなかった。自分が発言しなければ、それだけに話に身がはいらなかつたように思う。

それが、先生の方やみんなの相談によつて、だんだん話をする人が多くなり、今では、だれひとりとしてだまつているようなことはなくなつた。すなおにものをいい、相手の話をしまひまで聞けるようになった。

したがつて、自治会の決議にしても、学習問題の解決にしても、みんなの研究や意見がよく加わつていて、けつしてかたよるようなことはなくなつた。学級が、いつも楽しく、明るく、

気持よくまとまつているのも、話し方がみがかれてきた結果だと思ふ。

わたしなどは、もとは、ものをいわない方であつたが、ちよつとしたきつかけで、話ができるようになった。その時、うれしかつたのは、わたしもみんなのなかまに加わつたという自覚を得たことであつた。みんなの話しあいの中に、自分も交じつていふということが、何かにつけて、どれほど自信づけられたかしのれない。

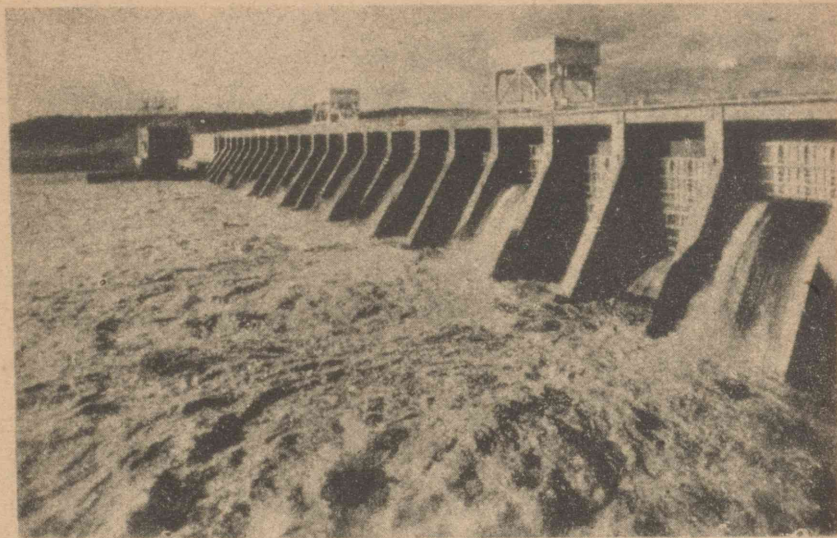
それから、学級の仕事や、学校の仕事の手伝いをする時も、この喜びと自信をいつも感じてきた。一つのまとまつた仕事の一部分に、自分も参加しているということが、どれだけわたしを元気づけたかしのれない。また、自分というものをたいせつに

考えるようになったのもこのためである。
ひとりびとりがこのような自覚にたち、ほかの人のやることを尊重し、協力するようになったら、この社会がどんなに楽しく、愉快なところになるだろうと思う。民主主義ということも、こうしたところから、その芽をふいていくのではないだろうかと思っ

この間、兄から、「TVA」の話は初めて聞いたが、聞きながら、さすがにいきどいた大きな仕事であり、運動であり、考え方であると感心をした。それとともに、日ごろから考えていたわたしの考えも、まちがってはいいないという確信をもつようになった。

TVAというのは、「テネシー・バレー・オーソリテイ」ということばの頭文字をとった略称で、日本語に訳すと、「テネシー河域公社」ということになる。これは、国策として、アメリカの東南部テネシー州を流れる、ミシシッピ河の支流テネシー河の流域開発を目的とする、合衆国の政府機関である。

TVAの歴史は、テネシー河がもつぱら発電を目的として、利用されていたことに始まる。



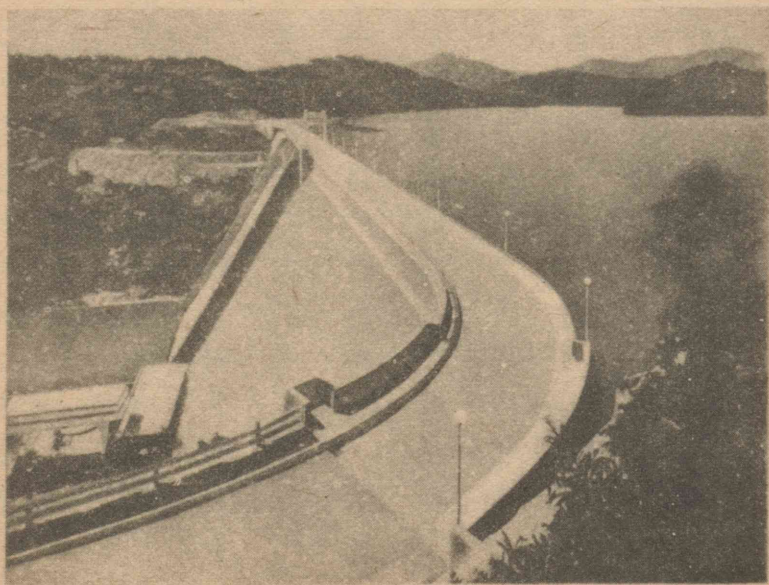
一九一六年、第一次世界大戦の時、アメリカ政府は、テネシ
ー河口から二百六十マイルのところ、マスル・シヨールズに大
きなダムを築き、水力発電所を作った。火薬工場も建てた。

しかし、戦後はこの発電所も工場も使用されなくなり、その
ままになっていたので、上院議員のノリスは、政府がこれらの
施設を動かすことによつて、正しい電気料金算定の基準をきめ
たらとお願いしたのである。

これに対して、政党の間には是非の論争がかわされたが、民間
の電気業者たちの反対がはげしく、なかなかきまらなっていた。
一方では、資源の保護・開発ということから、このマスル・
シヨールズ地方に限ったことではなく、広くテネシー流域一帯
を開発しなければならぬという声が高まってきた。

そこで、そのような総合的な開
発をするのには、どうしたらいい
かというので、調査が開始された。
その結果、水運・こう水防止・発
電・植林・地上資源の開発など、
一体的に計画し組織していくのが
いいということになった。

一九三三年のアメリカは、今ま
でにない不景気におちいつていた。
時の大統領ルーズベルトは、なん
とかしてそれを乗りきろうと考え、
TVAを政府事業として出発する



ことにし、各政党の賛成を得て、マスル・シヨールズ問題も、この大計画の中にとり入れた。

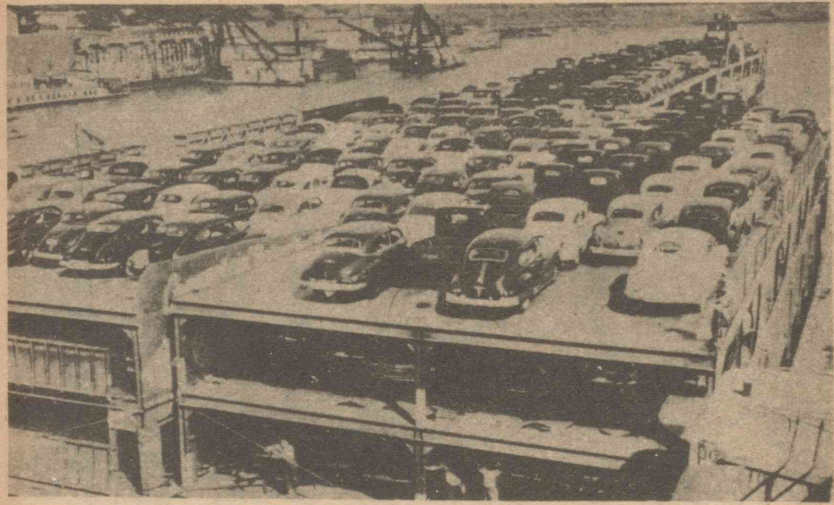
TVAの開発計画で、最もすぐれていると思つたのは、自然というものをばらばらにしないで、これを一つのまとまつたものとして生かしつつ、総合的にとりあつた点である。

とかく、土木工事になると、ある一つの目的のために、他をかえりみなくなることが多い。木材を得るためには、森林資源の問題などかまわずにきりたおす。そのためにこう水が起り、風光の美を損ずる。電力資源だけを目的にダムを築いては、水運の便をさまたげ、銅山をほつては、附近が害毒におかされるのもかまわないというふうに。

しかし、TVAは、この点に深い考察を加え、仕事の連関を考慮して、全体が一体のものとして進められていった。この実行に当り、各方面の識者——土木技師や電気技師はいうまでもなく、建築学者・生物学者・地質学者・農業技師、そのほか、医師・教育者・芸術家などが選ばれて研究に当つた。

兄は、自然界には、大きな大きな循環じゆんかんがあるといつた。そうして、その大きな循環の生きた形を、TVAはゆう弁に物語つているといつた。

六千フィートの高い山のしや面に雨がふる。雨水は、草や木の根や、地下のすき間をくぐつて、数千の水脈となつて流れる。それが一つの流れに集まり、その流れがさらに合流し、しまいには湖水に注がれ、ダムにたくわえられる。それが、きよ大な鉄管を流れ下つて水車を回転する。水の工

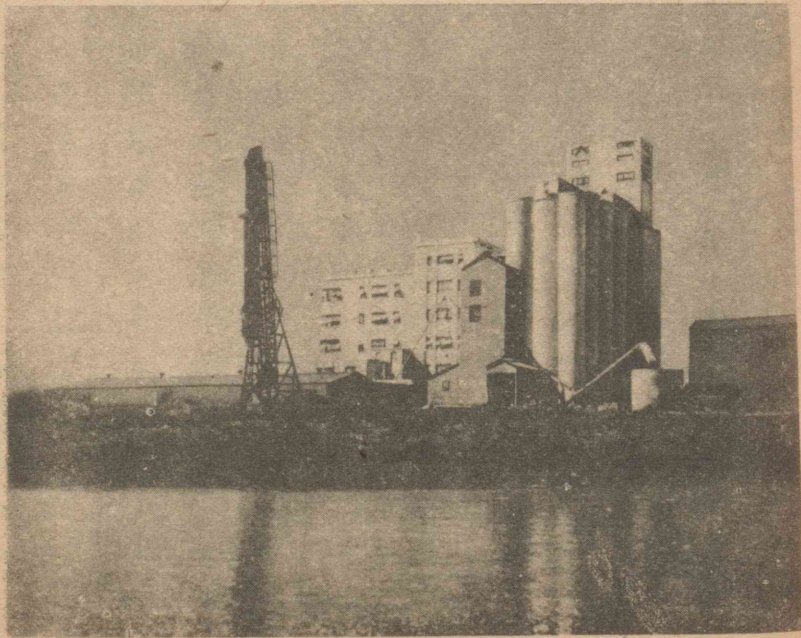


エネルギーは電気に変えられ、水は、さらに十ほどの湖水を満たし、たくさん
の水車を回して海へ流れこむ。
水車を通るごとに起した電気は、リ
ン鉱石をすばらしい化学製品——リン
さん肥料にする。りんさん肥料は、農
民の手で地上にまかれ、土に新しい生
命をよび起す。太陽のエネルギーをと
る牧草の成長をうながす。牧草は動物
を、動物は人間のエネルギーを補う。
さらに土地を保全し、川を清め、地中
に水をたくわえてくれる。

そうして、この水は再び、人間の
造ったきよ大な湖に、静かにも
どつて来る。

こうした大きな循環がくりかえ
されて、つきることがない。これ
は、自然と科学と生活との見えざ
るつながりであり、調和である。

兄の話によると、TVAのでき
る前のテネシーの谷は、じつにあ
れており、おとろえており、また
こう水におびやかされていたとい
うことである。



それが、十年間の努力によつて、みるみる報いられてきた。寒暑をいとわず、風雨をおそれず、木をきりたおし、岩をくだき、トラクターの力を借りて土地を開発した。千二百マイル以上の大きな道路をつくり、百四十マイルの鉄道をしき、ダムをつくるために数千トンの爆薬ときよ大な電気シヨベルを使用し、三千万立方ヤードの岩と土とをほり起した。

また、河流をせきとめるために、一億一千三百万立方ヤードにのぼるコンクリートや岩や土を注ぎこんだ。この大きさを、ほかのものと比べてみると、エジプトの七つの大きなピラミツドの十二倍以上の容積になるといふ。

きのうまで静かな綿花取引きの町が、きょうはにぎやかな河港の町に変つてゐる。流域には、新しい仕事がかんどんできて

穀物用のエレベーター、製粉所、油送施設などが、たちまちできた。郡に一つの電話もなく、一マイルほどの送電線さえなかつたところ、それが今日では、数万の農家の家庭やその庭先に、じゆうぶんな電力がもたらされた。各家庭に電気冷蔵庫が備え

つけてあり、水を手おけて運ぶ代りに、電気ポンプでくみ上げている。納屋には、まぐさのかんそう機があり、電力はさらにハムをいぶし、いもを加工し、ミルクを冷やす。

いたるところに遊園地がつくられ、図書館ができた。学校の



設備がよくなり、りっぱな病院が建てられ、明るい公会堂ができた。

こうして、アメリカで最もあれていた地方が、十年の間に、最も豊かな土地に変わってしまったという。

兄はこのほかに、いなかのおとなたちが、TVAの精神を理解しかねている時、子どもたちが進んでこれに参加しようとしたことや、マラリヤ病を防いだ話などをしてくれた。しかし、わたしがとくに心をひかれたことは、この大きな仕事で、政府の手で進められていながら、そこに働くひとりびとりが、分担たしているそれぞれの仕事に熱中してやったということであつた。事業が大がかりであればあるほど、一つの高いところからの指令によつて動きがちなものだときいてゐる。

TVAの動きには、それが見られない。個人々々の力というものをもじゅうぶんに生かし、利用し、意味づけている。ここが、じつにすばらしいと思つた。TVAの人たちは、みな自分がこの世界的資源の大々の開発に参加し、一役を引き受けていることを自覚して働いた。その自覚が、それらの人々をいかに元気づけたかしのれない。

TVAの人たちは、自分の従事している開発事業によつて、幸福と繁栄はが生れてくることを意識し、これが、民衆の手で成しとげられることを確信していたにちがいないと思つた。

わたしは、みんななどの話しあいによつて、一つの問題を解決したり、学級や学校の仕事の一部を、責任をもつて受けもつ喜

びを、TVAの話によつていつそう新たにした。
わたしの喜びは、小さいものかもしれない。しかし、人々と力を合わせていくことによつて、TVAの人たちのような、大きな喜びに発展させていくこともできそうに思う。

学習の仕方

- 一 何が書いてあるか、まとめて話ができるように学習しましょう。
- 二 作者は、どんなことに人間としての喜びがあるかといっているのでしょうか。
- 三 TVAの事業のどんな点が進歩的であるか、書きだしてみよう。
- 四 現代の日本とTVAの精神について話しあつたり、作文に書いたりしましょう。
- 五 この文を中心に、学級・学校・社会と自分とのつながりを考えてみましょう。
- 六 二課をまとめて、「かがやく目標とは何か」について討議しましょう。

三 希望

楽しかった小学校六か年の生活も、やがて終ろうとする日が近づいてきました。正雄たちは、長い間お世話になつた先生に、記念の作文集をさしあげることになりました。

早く書きあげた人から、毎日数名ずつみんなの前に立つて読みました。それとじて、表紙に「われらの希望」と書いてさしあげました。

先生は、「風車の歌」と題して、その歌詞をみんなのために刷つてくださいました。それをみんなで声高らかにろう読をして、最後の国語学習を終わりました。



これは、目に見えない世界でも同じではないでしょうか。たとえば、同じ学校の同じ教室で、同じ先生から同じ教科書で、同じ時間に同じように教えを受けていながら、わたし

(一) われらの希望

いよいよ、この学校にも、先生にもお別れするのだと思うと、むねがつまって、考えがまとまらなくなりそうです。

それに、これから書くことは、はたして希望というようなことになりそうですか。ともかく、日ごろ思っていることを少しばかり述べてみることにしましょう。

わたしには、ふしぎに思われてならないことがあります。

それは、人間というものは、ひとりびとりがこんなにもちがうものだろうか、ということですよ。

たとえば、絵を書く時、同じ花を写生していながら、できあ

がりの作品が、人によつてめいめいちがっていることなどで、それがよくわかると思います。みんなの目が、その花の像をと

らえ、それぞれの手によつて紙の上に表示されていく、——その間に、こうもちがったものになって生れてくるものだろうか、おどろかずにはいられまん。

たちの身についたものは、それぞれ人によってちがっているのではないだろうかということです。

わたしはずっと前から、この世界ぢゆうに、同じ人間がふたりといたないということに気づいていました。それは、ごくあたりまえの話で、なんでもないことのようにですが、よく考えてみると、じつはたいへん重大なことではないかと思うのです。わたしという人間が、世界ぢゆうに、限りない歴史を通じて、たったひとりしかいないのだということは、何か、しみじみと考へさせられるものがあります。学習によって身につくものが、ひとりびとりちがうのではないかということは、こんなことからも考えられるのではないでしようか。

そう思うと、自分というものが、いかにもたいせつなものに考えられてくるのです。それと同じように、友だちひとりびとりが、日本ぢゆうの人、世界ぢゆうの人、そのひとりびとりが、いかにたいせつなものであるかがわかるように思います。

わたしは、自分というものをたいせつにするとともに、他人のこともそまつに考えてはならないと思います。自分というものをよくみつめて、自分を見失わないようにのばしていくとともに、他人に対しても、真心をつくして接しなければならぬと思つています。

わたしは、こういうことから、先生のお仕事のとうとさがわかるような気持がします。ひとりびとり異なる人間を、それぞれにお育てくださることは、なみたいていのご苦労ではないと思います。できれば、私も学校の先生になつて働いてみたいよ

うな気がします。

けれども、それは中学校にいき、さらに上級の学校へ進むうちに、わたしの心の中に、しだいに形づくられてくる問題ではないでしょうか。こんなことでは、希望というようなことにはならないかもしれませんが、「自分をしつかりとみつめていく、」そして、忠実に生きていくということを申しあげて、それに代えたいと思います。(みどり)

川西村の親類に、豊くんというところがいる。ぼくと同じ年で、ぼくにとってが一番親しい友だちでもある。

この春、自分の進むべき道について、手紙で意見を求めてきたことがある。ぼくはそれまで、そういう問題について考えて

みたこともなければ、思い迷ったこともなかった。ぼくが、自分の将来に一つのゆめをえがきだしたのは、じつは、その手紙がもとになったのである。

おとなになつたら、こんな職業につくなどと、はっきりしたことはいえない。それにしても、今まで歩いてきた自分の道をふりかえってみたり、自分の心に問うてみたりして、これからこんな道を進んでいくのではないかなどと想像してみることは、それだけでも楽しいことだと思う。



ぼくは、ひとりて走るおもちゃのトラックを、考えて作って
みたことがある。また、かなり根気よくこん虫を集めたり、そ
れを分類して標本を作ったこともある。晴雨計を考案して、そ
れで自然の動きを記録してみたこともあった。くふうしたり、
集めたり、考えてみたりすることが、どうもぼくの性格に合っ
ているようだ。

それに、豊くんのところになんども出かけていつているうち
に、村の生活がすっかりすきになり、山や川や林などの問題が、
じつに身近なものになってきた。

小さい時から、山に植林にいたり、水門を調べてみたり、
久くんのいさんにつれられて谷川のようなすを見にいたり、
ゆうが燈のことを研究してみたり、また、村の植林計画を調べ

にいたりして、これらの問題について関心をもた
ずにはいらなくなってきた。

ことに、よし子さんのおじさんから、緑地計画のことや、デ
ンマルクの話などを聞き、最近になってTVAのことなどを知
つてからは、なんだか、おどなになってからの仕事が、きまっ
てしまったような気持にさえなってきた。

豊くんは、一生を農村に送るべきかどうかについて、ずいぶ
ん思い迷ったらしかった。が、今では、はっきりと農村のため
に勉強することに進路をきめているらしい。ぼくも、豊くんと
同じ方向に向かって勉強したいと思つている。そうなる、す
べての学習がそのためにあるような気がして、勉強にも身がは
いるように思う。

ぼくのこの希望は、豊くんをたいへん喜ばし、勇気づけたらしい。しかし、ぼくは豊くんの考えているような、農家や農村の問題について、具体的に研究するわけにはいかないだろう。生活条件がちがうからである。

日本の国土と人口との関係を考え、この国をほんとうに住みよい国にするために、治山治水、耕地開発、農村増産のことなど、今のうちから研究を積んでいきたいものだと思う。

国土計画に関する大きな問題だけに、ぼくにとつてはずいぶん遠い道だろう。一生かけても歩きつくせない道かもしれないけれども、この道のかなたを思う時、ぼくの心には大きな希望があふれてくるのだ。(正雄)

ぼくがこの学校に転校してきたのは、二年生の冬だった。

友だちと別れ、見知らぬ土地にきて、とほうにくれていたぼくは、たちまちあたたかい友情の輪にとりまかれ、生れ変わったような明るい気持ちになったのを、ついきのうのことのように思いだす。ふぶきの朝、歩けそうもないので帰りかけたところを正雄くんとよし子さんに会ってはげまされ、思いなおして共に登校したこともなつかしい思い出。この学校を去るに臨んで、ぼくは何よりも厚い友情に対して、心から感謝をささげずにいられない。

さて、ぼくの希望であるが、ぼくは科学的方面に進みたいと思っている。科学といつてもずいぶん広いのだが、そのうちのどの方向を選ぶかについては、まだはつきりしていない。希望

とはいうものの、将来の方向というよりは、むしろ、現在の興味に根ざしているといった方が適切かもしれない。

ぼくの心の中には、常に、「なぜ」ということばがつきまといいてはなれない。それは、一つの習慣のようにさえなっている。何を見ても、何を聞いても、すぐ「なぜ」ということばが心の中で頭をもたげるのだ。そして、それを解明し、それに解決をあたえることが、ぼくにとっては何よりも楽しいのだ。

「なぜものが見える。」「なぜ風がふく。」「なぜ鏡にうつる。」「なぜマツチは発火する。」「なぜなぜの連続である。なんでもない、ごく当然のことでも、「なぜ。」に会うと、たちまちふしぎでたまらなくなり、だんだんわからなくなる。そして、それを知りたいと思う慾望で心がはずんでくる。

そのくせ、ほんとうに納得のいったものは少く、ほとんど疑問のまま残り残されているといつてもいいほどだ。

父はよく、

「そういう態度は、科学の道の第一歩だ。しかし、おまえのようには何もかも疑問に思い、あれも知りたい、これも知りたいと心をみだしてもむだなことだ。一つのを徹底的に追究してみることにたいせつだ。それが糸口となつて、未知の世界がひらかれていくのではないかな。」

といつて、注意する。

このごろはラジオに興味を感じて、小学校卒業記念にと思い、その組み立てに熱中している。「なぜ」のくせは、ここでもしきりに頭をもたげる。部分品の種類、機能、組み立ての順序はわか



ているのか、それは一々数えきれないほどのものだろうが、数えないかわからないだけのこと、そこには事実として、はっきりとした数があるか、
ぼくたちは数の中にうずまわっているようなものだと思う。しかも、その数は、一定の体系や法則のもとに整然とした形で、天地をつくつてい
るような気がしてならない。人体の体温や脈はくが、一定のちつ序を保
つていてこそ生命が保たれているよ

っているが、その一つ一つがすでにふしぎでならないのだ。電
じしゃくを作るためにコイルをまきながら、それが「なぜ」のど
りこになつてしまひ、いつのまにか手を休めて、ぼんやりと考
えているというしまつである。
科学的方面に進みたいもう一つの理由として、ぼくは算数が
すきだということあげたい。算数というよりは、あるいは数
そのものにぼくの興味があるのかもしれない。
この世のすべてのものが、数で構成されているような気がし
てならない。広い空間でも、長い時間でも、すべて数で計算で
きそうに思う。よく、「無限」とか、「無数」とかいうことばが用いら
れるが、ぼくはそんなことばをこのまなひ。一本の木にどれだ
けの葉がついているのか、人間の頭になん本のかみの毛がはえ

うに。

それも、そう思うだけで、今の私にはそれ以上なんともいえない。ただ、ぼくは「なぜ」という疑問と、この数の問題とを結びつけていくところに、自分の進むべき道が見いだされてくるのではないかと思うだけである。

「おまえのように先を急いではいけない。すべての教科は、将来をきりひらいていく基本になるのだから、今のうちに一方にかたよるような学習の仕方をしてはいけない。」と、父母に注意される。

そのたびに反省もし、すべての教科に精を出してみるのが、いつのまにか、頭が科学的な教科だけに向いてしまうのでこまづている。

しかし、文化的な生活を営んでいくためには、科学は不可欠な要素であり、活力であると思う。ぼくは、どうしてもこの方面を勉強してみたいのだ。時には、ぼくのことだから、研究がかたよってしまふようなことがあるかもしれない。しかし、それもラジオの部分品のように、全体の構造の上からは必要なものになってくるのではないかと思っている。(定男)

私は十二才です。十二才という年令は、人の一生からみて、どういう位置にあるものでしょう。

私は日本人です。いまの日本は、世界の国々との関係において、また、歴史の流れの上から、どういう使命をになっているのでしょう。日本人は、どんな生き方をしなければならぬの

でしよう。

私は女です。男女平等と一口にはいいいますが、何から何まで同じでなければいけないのでしようか。人間としての価値や、人格の上においての平等であつて、女には女としての道が、おのずからあるのではないでしようか。

考えてみれば。いろいろな条件が私を位置づけ、私の生活を支配し、私の進むべき道を指示しているように思われなくなりません。

私は四年生の時、一か年の作品を集めて「足あと」という記念の作品集を作つてから、それまでのものや、それから後のものを集めて、いくさつかの「足あと」にまとめてあります。それらを読みかえし、自分の成長のあとをふりかえつてみても、こうした

条件が私を支配し、育ててきているのをみのがすわけにはいきませんでした。

私だけではないと思います。人々はみんな、それぞれの条件のもとに、人生の歩みを続けているのだと思います。かといって、その足どりがみな同じではありません。そこに、その人なりの歩み方、独自性といったものがみられると思います。私にも、私なりの歩み、独自性があるわけです。

私は、この独自性と、私にまつわりついている諸条件の結び



めから、人生の方向を見いだして進んでいきたいと思ひます。
私は、読んだり書いたりすることが、何よりも大すきです。
そして、ことばというものにどんなに感謝し、興味を感じてき
たかしれません。

何を読み、何を書くかはともかくとして、読むそのこと、書
くそのこと、そして、そこに用いられていることばそのものに、
私はよりいつそうの興味を感じているのです。

ことばは、たしかに文化を育てていく原動力だと思ひます。
文化の發達は、ことばなしには考えられないと思ひます。私は、
もと、文化の原動力は人間の思考の力にあるのではないかと思
つていました。ところが、よく考えてみると、思考そのものが
ことばであり、ことばによつておし進めているのではないかと
気づいてから、ことばのとうとさを、いつそう切實に感じたわ
けです。

つまり、私が自分の心にひそんでいるものをみつめたり、考
えたり、自分をとりまく諸条件に気がついたりして、その結び
めから人生の道を見いだそうとするそのこと自体が、すでにこ
とばだといふのです。

私は十二才です。これからが、ほんとうに人間としてのびて
いく時です。木の芽が、太陽の光をすつてのびるように、私は
ことばをすつてのびるのです。

私は日本人です。世界平和のさきがけとして、また、文化の
国として、新しい日本を築かなければなりません。文化の原動
力としての、思想そのものとしての、ことばの力が最も發揮さ

れなければならぬときです。

私は女です。家をととのえ、小さい人たちを育て、社会を明るく、健全なものにしていく使命があります。物質的な富よりも精神的な富を築くのに、いつそう重要な役目をもっています。そこにも、ことばの問題が頭をもたげてきます。

私はまもなく中学校に進みます。中学校に進んだら、国語とともに英語もしつかりと勉強するつもりです。そして、ことばの力や、ことばによって形成されていく文化のすがたをみきわめていくようにしたいと思います。(よし子)

ぼくは、みんなからみると、いったいどんな人間に見えるだろうか。

いつも、先ばしったことをいったり、みんながまごつくようなことをしてきたのではないだろうか。

みがってなふるまいをして、みんなにめいわくをかけてきたのではないだろうか。

しかし、ぼくにとつては、じつに楽しい六か年だった。不愉快な思い出は一つもない。やわらかな風、明るい光の中を、思う存分手をふって歩いてきたような気がする。まったく、みんなの友愛のたまものである。

ぼくは、いまのしせいをくずさないで、この道歩いていきたい。ニュース・クラブの発案は、ここから生れたのだ。東西南北が、一つの大きな希望に向かって生きる。大きく生きる。その原形としてのニュース・クラブなのだ。



ぼくは、ニュース・クラブの精神が、波もんのようにひろがっていくことを念願している。その中心に立つて、生きぬいていきたいと思う。それが、ぼくの希望でもあるのだ。四年生の時、「アルプスの少年」のこどばが問題となって、「いい人」と「えらい人」について、さかんに討議したことがある。結局、「真にいい人はえらい人で、真にえらい人はいい人」であると結論したように覚えている。しかしあの問題は、あれで解決さ

れたとぼくは思わない。

「えらい人」と「いい人」は、あるいは同一であるかもしれないが、そういう人間にはどうすればなれるのか。ぼくは、そこまではないかなければ解決されたとはいえないと思う。口先だけの結論は無意味だ。

ぼくは、この大きな未解決の問題ととり組んでいきたい。身をもつてそれを解決したい。自分のおこないが、この土地、この国、そして世界につながるような、人間として生れたかある生き方をしたい。そして、この問題に解決をあたえたいと思う。とりとめのない希望のようであるが、いまのぼくにはこんなことしかいえない。

六か年の生活が楽しかっただけに、この学校に別れるのはな

ごりおしくてならない。お別れするにあたって、ぼくたちのた
ましいのふるさとである母校の発展と、こころの父である先生
のご健勝を心からお祈りする。(久)

学習の仕方

- 一 五人の作文が、それぞれ何を書いているのか、はっきりとまとめよう。
- 二 五人の作文を中心に、人間の生き方について考えたことを書いてみましょう。
- 三 小学校生活に別れを告げるにあたって、感想を作文に書きましょう。
- 四 記念の文集を作ったり、国語学習を通じて学校に残すものをつくりましょう。
- 五 六か年の国語学習を反省しあいましょう。
- 六 「われらの希望」を話題として、話しあいをしましょう。

(二) 風車の歌

まわせ、まわせ
風車をまわせ。

風車の四つのはね、
それは、「話す・聞く・読む・書く」だ。

国語のすがたであり、
言語の活動である。

さあ、しつかり持て、人間力のしんぼうを。

それ、いけ、文化の風を受けて。

まわる、まわる。

進歩のら線をえがきながら、
まわる、まわる。

まわせ、まわせ。

大きな風車をまわせ。

風車の四つのはね、

それは、「頭のう・心・手・健康」だ。

人間のとうとさであり、

人生の原理である。

さあ、しっかり持て、祖国愛のしんぼうを。

それ、いけ、世紀の風を受けて。

まわる、まわる。



はげしい風には、いよいよ勢いよく
まわる、まわる。

まわせ、まわせ。

大きな、大きな風車をまわせ。

風車の四つのはね、

それは、「東・西・南・北」だ。

世界の国々であり、

文化の理想である。

さあ、しっかり持て、人類愛のしんぼうを。



それ、いけ、平和の光を受けて。
 まわる、まわる。
 大きな一つの輪をえがきながら、
 まわる、まわる。

学習の仕方

- 一 「風車の歌」は何を歌っているか、深く考えてみましょう。
- 二 この一年間の国語学習を、この詩に照らし合わせて考えてみましょう。
- 三 この詩を中心に、六か年の国語学習を反省してみましょう。
- 四 一年生の時の「かざぐるま」を思い出しながら、六か年の国語学習をまとめる仕事をしましょう。
- 五 「国語の力」について話しあいましょう。
- 六 「人間・祖国・人類愛」を話題として話しあいましょう。

新しいことば

11	長女	うらつける	ラジエーム	11	抽出	人工放射能	そう話
10	親密 莊嚴	知己 儀式	なごやか 公会堂	12	まれな さん嘆	奉仕 担当	
9	足どり	メダル	賞状	13	教だん	ひきつづ	好奇心
8	えしゃく 屋上 定期	容席 えんび服 盛況	賞状 皇太子妃	14	缺講	もちろん	後任者
7	とるものもとりあえず	ふりそで		15	広場	前任者	
6	かち得			16	聴講券	衣服	
5	機械学 採鉱作業 遺志	無煙火藥 爆薬工場 制定	創製 有益	17	達成	物質	敬愛
4	受賞者 平和運動	内定 授與	まのあたり	18	理学部	指導	結婚
3				19	官職		
20				20	給料	高價	購入
19					予算	私費	破産

65	64	61	59	57	56		55		54		52	51	34	33	32	31	30	29		28	27	26	25	23	22	21	20		
職業	忠実	教科書	歌詞	繁榮	分担	遊園地	施設	エレベーター	ヤード	綿花	保安	りん鉱石	循環	考慮	根幹	戦線	戦場	戦場	戦場	戦場	戦場	戦場	戦場	戦場	戦場	戦場	戦場	戦場	戦場

80 もたげ(て) 形成
 81 さきばし(つた)みがって ふるまい
 友愛 発案
 82 波もん 結論
 83 きゆう局 無意味 未解決

84 なごりおしくて たましい ふるさと
 健勝
 85 しんぼう
 86 ら線 祖国愛
 87 人類愛

券(15) 衣(16) 児(26) 勸(28) 仁(28) 幹(31) 憲(40) 略(47) 河(47) 訳(47)
 策(47) 党(48) 是(48) 弁(51) 補(52) 郡(55) 詞(65)

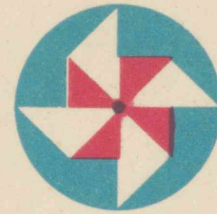
39ページ 寫眞はCIE許可済

本書の中、既成の作品から引用し、又は新しく執筆を依頼したものは次の通りである。

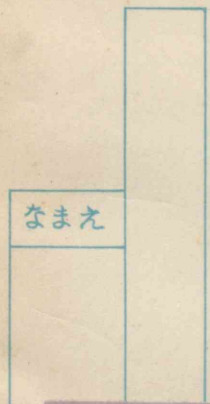
かがやく目標 石森延男
 さし絵
 関合正明
 そうてい
 河野鷹思

新国語 六年 下		昭和二十五年
小国 623	希望	昭和二十五年
APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION (DATE 1950)		印刷
発行者 光村図書出版株式会社	発行者 八木橋雄次郎	印刷 日
印刷者 光村原色版印刷所	代表者 大江恒吉	発行 日
代表者 光村利之	代表者 大江恒吉	定価 円
発行所 光村図書出版株式会社	東京都品川区東大崎一丁目五三三番地	

光村図書出版



6
下



なまろ

広島大学図書

広島大学図書

0130449753



光村図書出版株式会社